

ESD の担い手を相互ネットワークで繋げる脱中心化アプローチ Decentralized Approach to Link ESD Agents with Reciprocal Networking

○富田英司, 竹下浩子, 藤原一弘, 向平和, 井上昌善

TOMIDA Eiji, TAKESHITA Hiroko, FUJIWARA Kazuhiro, MOKO Heiwa, & INOUE Masayoshi

愛媛大学教育学部

Faculty of Education, Ehime University

【要約】本研究は、地域に根ざしたかたちでより広く展開し、担い手同士が互いにより影響を与え合う関係を構築するためのアプローチを具体化することを目的としている。その事例として本研究は、令和5年度ユネスコ活動費補助金（SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業）事業「概念型カリキュラムによる ESD 地域展開を支える4領域連携モデル」の一環として、愛媛大学が2024年2月に開催した ESD 実践交流会を事例検討した。本研究は、担い手が地域の実践的ハブを中心にネットワークを構築する従来の連携モデルではなく、これからは実践ハブ同士や担い手同士がおおよそ並列の関係で相互に結びつく脱中心化アプローチによる連携が重要であることを指摘した。

【キーワード】 ESD, 連携, 交流, 脱中心化

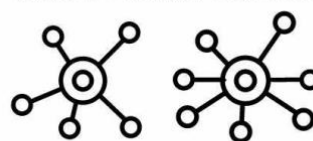
I. 問題と目的

1. ESD の現状と課題

本研究は、ESD（Education for Sustainable Development, 持続可能な開発のための教育）の担い手が地域に根ざしたかたちで広く展開し、担い手同士が互いにより影響を与え合う関係を構築するためのアプローチを具体化することを目的としている。ESD の推進においては、従来から「連携」が重視されてきた。文部科学省が発行する「持続可能な開発のための教育(ESD) 推進の手引」においても、令和3年5月改定において、カリキュラム・デザインにおける ESD の位置付けと学校内外での連携の促進に強調が置かれたことはその流れを代表するものである（文部科学省国際統括官付日本ユネスコ国内委員会, 2021）。

これまで公開されている多くの論文では、それぞれの担い手が自らの取り組みを強化し、質を高めるための連携を進めている。しかし、1つ1つの担い手は盛んに有意義な連携先を見つけて事業を展開しているが、そのような取り組みをしている担い手同士を結びつけることに関する研究報告はほとんどなされていないように筆者らには思える。つまり、それぞれの担い手をネットワークの地域のハブと捉えたときに、そこ他の関連する企業や団体や個人等とは繋がりが作られていることはそれらの取り組みでは示されているが、その一方でハブ同士の繋がりができていないという傾向があるように見受けられるのである。

従来の「連携」のかたち



いま必要な「連携」のかたち

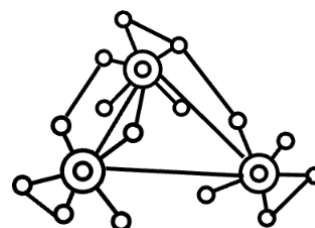


図1 2つの連携のかたちの模式図

このような状況を模式化したものが図1の上部の図である。この図では一重丸が個々の担い手を、二重丸が地域ハブを示している。従来の連携では、個々の地域ハブは様々な担い手と連携しているものの、地域ハブ同士は繋がっていない。このような従来の「連携」のかたちも、有意義な連携である。しかし、この形では、異なる地域ハブと連携する担い手同士の繋がりは起こらないため、似たような取り組みや考え方を持っていても相互に刺激を与え合う可能性は低い。他方、図1下方の模式図では、地域ハブ同士が結びつくとともに個々の担い手同士も繋がっている。

上述の手引の一節「地域や大学、企業、社会教育施設等との連携づくりの手法」では、協力や連携の仲介を依頼できるアクセスポイントとして、①ESD 活動支援センター、②ESD コンソーシアム、③国連大学 RCE、④各地域の ESD 協議会や ESD サークル等、⑤博物館等の社会教育施設が挙げられている。その他、世界遺産やエコパーク、ジオパークといったユネスコ事業も連携先に含まれる。これらの重要性や有効性は強調されるべきものである。しかし、これらアクセスポイントも、それぞれの地域における個々の取り組みを相互に結びつけるというよりも、ある取り組みに有効だと思われるもう1つの取り組みと線で結びつけていく営みがネットワークの中心に置かれているため、図1で言えば、従来の「連携」のかたちと相当する性格が強いものと言える。

このように地域ハブがそれぞれある程度独立してそれぞれのネットワークを担い手へと広げていく構造は、並行して行われている近隣の同様のねらいや方向性を持ったプロジェクト同士を自発的には繋げていくことが難しいと考えられる。また、図1情報の模式図で示される連携のあり方は、「優れた取り組み」を答えとして地域ハブや国の ESD 関連機関がすでに持っており、それを各地域の担い手が取り込むという一方的な関係の構築に繋がるかもしれない。もしそうだとすれば、このような一方的な関係は各担い手の自律的な活動や潜在的な可能性を引き出していく上で障害となる可能性すら考えられる。

それに対して、今後さらに ESD が活発に展開されるためには、個々の担い手が地域もしくは国の「中心」となるハブとの接続をねらっていくのではなく、ハブ同士が繋がりあう図1の下部のような連携のあり方を促進するような取り組みが重要になっていくと考えられる。ハブ同士の横の繋がりに重点を置くアプローチはその特徴から「脱中心化アプローチ」と名付けることができる。

本研究はそのような地域ハブ同士が相互に繋がりあうようなネットワークのあり方を事例から検討することを目的としている。本研究が取り上げる事例は、愛媛大学が令和5年度ユネスコ活動費補助金事業「概念型カリキュラムによる ESD 地域展開を支える4領域連携モデル」の一環として2024年2月に開催した ESD 実践交流会である。この取り組みは筆者らが企画運営したもので、かつ本研究が指摘するハブ

同士の接続が実現したとみなせるような反応が参加者から得られたことから、その準備プロセスと開催当日の状況を含め、今後必要となってくる脱中心的なネットワークのあり方への提案につなげて考察する。

2. 取り組みの背景

ESD は全国に広がり、関係機関の配置やユネスコスクールも順調に展開を進めている一方、もしある教師 ESD を始めようとしたとしても、周囲に人的繋がりが不足している場合、独自に教室で展開するまでに長い時間を要すると考えられる。本研究の筆者を含めた愛媛大学の ESD に関わる研究者は、そのような教師が本務校の取組に沿ったかたちで、単独でも ESD に取り組めるよう多角的にリソースを提供することを目的として本事業を令和5年度ユネスコ活動費補助金（SDGs 達成の担い手育成（ESD）推進事業）に申請した。

この申請書では、開発するリソースとして、次の4領域とした：A)多くの年代の子どもが社会の最新事情にアクセスできる「調べ学習ウェブ資料」、B)アクションに繋がる学びを自己評価する「評価ウェブツール」、C)探究的な学びの単元を教師が開発する際にフレキシブルに活用できる「指導案・教材資料」とそれに基づく人的交流、D)上記で開発する資料とツールを活用・更新し、地域に開かれた相互研修の場を提供する「放課後 SDGs 教室」。本論文で取り上げる ESD 実践交流会はこのうち、領域 C に相当する。

領域 C では、1年間から数年間の課程表を公立学校等の一般的な時間割の枠組みに沿った形でのモデルカリキュラム（小学校及び中学校）、総合的な学びの時間と各教科を横断したモデル単元、単元内での各学習活動の展開、各学習活動で利用するワークシート等の教具を、ウェブサイト上にて公開すること等をねらいとした。カリキュラム・単元の開発は、国際バカロレア認定校を始めとして世界中の探究的な学びを実践する学校で採用されている「概念型探究（Concept-Based Inquiry）」（Marshall & French, 2018）と呼ばれる枠組みに基づいて進めることを想定した。加えて、全国の教師に向けて、独自に作成した指導案や年間指導計画、教具等を公表するリポジトリを構築し、ポータルウェブサイトを通じて、いつでも投稿し、予め設けた規準に従っていることを確認した上で、公開する

こととした。そして、ESD 実践に基づいて、学校教諭や研究者をはじめとした様々な担い手が交流する「ESD 実践交流会」を開催することを計画に盛り込んだ。本研究が検討の対象とした ESD 実践交流会はこのような位置で取り組まれた。

II. 方法

1. 実践概要

愛媛大学 ESD 実践交流会は、愛媛県を中心として県内外の ESD の取り組みを、学校教員・生徒、社会教育団体、社会福祉法人や NPO 等の各種団体、地方自治体、大学生、研究者、一般企業等が発表すると同時に、お互いの取り組みを知り、ネットワーキングを進めることをねらって企画された。そのため、発表形式はポスターとした。

発表者が参加しやすくなるよう、ポスター発表の経験に応じて、Microsoft PowerPoint の雛形を提供するなどの原稿作成支援、ポスター発表の方法に関するインストラクション、ポスター用紙 (A0 版) への印刷などを事務局が支援した。

募集については、当事業の成果を集約するために立ち上げたウェブサイト (<https://sdgs.esd-tools.site/>) にて 2024 年 1 月に募集情報を公開するとともに、筆者らが発表適任者と考えた SDGs 達成の担い手に直接連絡を取ったり、それぞれがアクセス可能な団体やコミュニティに募集の周知をおこなった。発表者は 16 件であり、その発表内容と発表者の所属は表 1 に示す通りである。

開催日時は 2024 年 2 月 23 日 (金・祝) 13:00~17:00、会場は、愛媛大学ひめテラス 1F の地域交流スクエア) であった。参加費は無料であった。発表関係者とオーディエンスとしての参加者をあわせ約 50 名が会場に足を運んだ。

2. 関連する ESD コミュニティ

筆者らの多くはそれぞれこれまでの教育実践を展開する中で、それぞれの ESD 関連コミュニティを構築している。

第 1 筆者は、教育心理学を専門とし、現在、概念型探究を活用して、子どもが主体的に地域の困りごとにかかわる ESD プログラムの開発に学生とともに取り組んできている。今回の ESD 実践交流会の企画を主に担当し、発表者を募集するにあたって、他の筆者や

本事業の外部評価委員に協力を求め、立場や世代が様々に異なる担い手がフラットな立ち位置で発表できる場作りを進めた。

第 2 筆者は、家庭科教育学を専門とし、さらに SDGs 教育にも造詣深い研究者である。本事業の外部評価委員として参画している社会福祉法人えりむ会や同志社大学経済学部准教授・原田禎夫氏をはじめとして様々な人脈を構築している。

第 3 筆者は ESD の教育課程や教育方法を専門としており、ユネスコスクールと連携した取り組みを進めている。また、奈良教育大学と連携して愛媛大学において開催していた「ESD ティーチャープログラム」の受講生を中心に、ESD に取り組む学校教員のネットワークを構築している。

第 4 筆者は、理科教育学を専門として、地域の理科教育の支援のみならず、様々な年代を対象とした各種科学教育プログラムや環境教育プログラムの開発と運営に取り組んでいる。

第 5 筆者は、社会科教育学を専門としており、特にシティズンシップ教育 (主権者教育) の研究を進めている。最近では、西予市と連携した防災教育に研究室の学生とともに取り組んでいる。

ESD 実践交流会の実施にあたっては、以上のような ESD 実践コミュニティへ筆者らがそれぞれ発表の呼びかけをおこなった。その結果、表 1 に示したような様々な担い手が県内外から集まることとなった。

3. アンケートの実施

この取り組みは上述のように SDGs 達成の担い手同士のネットワーク作りをねらいとして実践されたことから、その効果を評価するための資料を得るために、事後に発表者にアンケートを依頼した。

質問項目は、「今回の発表はどの程度有意義でしたでしょうか。」(評定のために設定された選択肢は「とても有意義だった」「ある程度有意義だった」「期待したほどの意義は感じなかった」「ほとんど意義はなかった」の 4 段階)、「以上のように評定された理由として主なことを教えてください。」「今回ご発表されたことについて、ご感想、ご提案、ご質問など何でもございましたらお寄せください。」というものであった。

アンケートは、ESD 実践交流会が終わった後に、発表者に E メールを用いて、Microsoft Forms の回答リンクを送り、回答を得た。

表1 第1回愛媛大学ESD実践交流会における発表タイトル一覧

タイトル	所属等
「教育」の視点から見るモザンビーク： これからの教育の在り方に迫る	愛媛大学附属高等学校 (生徒による発表)
地域教材を生かした社会に開かれた教育課程の推進： 児童のシビックプライドの醸成と行動変容を目指して	宇和島市立遊子小学校
地域活性化に向けた社会科学的手法を取り入れた教科横断的なESD学習 の開発	愛媛大学附属高等学校
四国西予ジオパークを活用したESDプログラムの提案	愛媛大学教育学部 (学生発表)
持続可能なまちづくりを目指す防災学習	愛媛大学教育学部 (学生発表)
SDGsの種と子どもの心の変化	社会福祉法人エリム会
三崎高校彩せんたんプロジェクト	愛媛県立三崎高等学校 (生徒による発表)
ESDの視点における美術教育	松山市立東中学校
大人の生き方と人生を詰め込んだ仕事図鑑！	広島県立大崎海星高等学校 (生徒による発表) 大崎上島町地域おこし協力隊
人とつながり、地域とよりよくかかわりながら自己の生き方を考える子ども の育成	愛媛大学教育学部附属小学校
水性フレキソ印刷、ヒートシール紙、マイクロフルートパッケージの紹介	セキ株式会社
プラスチック削減・研究プロジェクト「Plastic Journey」の取り組み	愛媛大学 Plastic Journey (学生による発表)
小学生を対象としたプラスチックの利用をしたクラフト単元の開発	愛媛大学教育学部 (学生による発表)
概念型探究の授業実践：アップサイクル商品の製作から販売	愛媛大学教育学部
愛南町（愛媛県南宇和郡）の生物多様性の保全と取組： 愛南探検隊の取組を中心に	あいなん探検隊
教科横断的なESDの学び	筑紫女学園大学

III. 結果

今回発表のあった 16 件の発表者に対して、アンケートへの回答を依頼したところ、全ての発表者もしくは発表代表者から回答があり、回収率は 100%であった。

「今回の発表はどの程度有意義でしたでしょうか。」という質問項目に対しては、以下のような回答結果であった：「とても有意義だった」(15 件)、「ある程度有意義だった」(1 件)、「期待したほどの意義は感じなかった」(0 件)、「ほとんど意義はなかった」(0 件)。

「以上のように評定された理由として主なことを教えてください。」という質問に対して、「とても有意義だった」と回答した者からは、次のような回答が得られた。なお、掲載にあたっては、回答者が特定できる情報は削除の上、明らかに重複した内容等を避けるために抜粋した。

- ・ 他団体との情報共有
- ・ 多世代、多領域の方々が交流されるイベントはほとんどないが、今回はそれが実現した
- ・ 世代を越えて、参加者同士が学び合うことができたから。大学教授や附属の先生の実践発表は公開研修でも教える、教えられる立場にわかれることが多いが本企画ではそれぞれの興味関心に合わせて学び合う場となっていた。
- ・ 発表者は普段関わらない企業様や団体様ばかりで、幅広い年齢層の方が発表されていた。大きな刺激を受けましたし、自身の研究の幅が広がる示唆をいただきました。人脈も広がったことも理由の一つ。
- ・ 異年齢の方々との交流は刺激的でした
- ・ 多種多様な方々との交流会はこれまで参加したことがなく、とても新鮮で有意義
- ・ 自分の個人で行なっているプロジェクトにつながる内容の活動を行っている人と出会えたり、活動に対して様々な人から意見をいただき、より活動に対してやる気などが湧いた。
- ・ 普段意見を聞かない大学生や大学の教授の方々からのフィードバックを頂けたから。
- ・ 大学教授の方や地域施設の方など様々な方から自分たちの発表に対してご意見をいただきとても勉強になった。
- ・ 意見交換の時間も長く、他の方の発表も多様で

有意義だった

- ・ ESD を美術の視点、防災学習の視点、幼児教育の視点など、様々な視点からの実践を聞くことができ、新たな発見が多かったから。
- ・ ESD の取り組みをされている色々な方の意見、発表を聞くことが出来たから
- ・ 様々な取り組みをされている方々と出会うことができたから
- ・ 高校生、学校関係者、社会人、世代や年齢を超えて繋がりを持つことが出来たから。発表内容も面白く、全員が真剣に耳を傾け声かけをしてくれた。
- ・ 様々な方のご意見を聞くことができ、今後の自身のまなびにつながった

IV. 考察

本研究は筆者らが企画運営した ESD 実践交流会を一事例として取り上げ、脱中心的な互恵的ネットワークの構築を促進するための手立てのあり方を検討することをねらいとした。

発表者を対象としたアンケートの回答より、今回の ESD 実践交流会を通して、多くの発表者が世代、領域、立場、取り組みの多様性に触れることができたことを、参加の意義として取り上げたことがわかった。しかもそのように発表者の多様性を特徴とするような交流の場は全く、あるいはほとんどないということ指摘する発表者が散見された。

このようなことから、ポスター発表という発表者間にヒエラルキーを設けない形式で、長時間発表者同士、あるいは発表者とオーディエンスが 4 時間というまとまった時間自由に交流できる場を設けることは、脱中心化アプローチによる連携を促進する上で有効であることが示唆される。

今回、子どもや若者の発表者は、高校生や大学生に限られていた。また、さらに発表した高校生や大学生においても、筆者らもしくはその関係者からの声掛けによって今回の参加が実現した。その意味では、今回の ESD 実践交流会は非常に限られた担い手にしかアクセスできていない。今後は、広く地域の生徒を対象に、各教育委員会やその他の公的な広報手段を通じて参加募集をおこなうことで、ESD を担う若者同士の交流や他の世代との交流を促進することが可能であろう。その際、各学校のカリキュラムや指導上の支援と

なるようなリソースを同時に提供することによって、効果的なコミュニケーションが交流会の中で実現しやすくなるだろう。

また、今回の実施では、たとえば小学校から大学生までの様々な若者がそれぞれどのような刺激を相互に与えるのかということ十分に想定できていなかった。しかし、小学生が中学生の発表からどのような影響を受けるのか、あるいは反対に大学生が小学生の発表からどのような影響を受けるのか等、多様な世代と立場、領域の人々が交流会の場を通して、どのような影響を一般的に受けるのか、そしてそれらが交流会の後の実践展開にどう繋がっていくのかといったことは研究の意義があると考えられる。こういった課題については、次年度以降の ESD 実践交流会においてさらに検討していきたい。

謝辞

この研究は令和 5 年度ユネスコ活動費補助金 (SDGs 達成の担い手育成 (ESD) 推進事業) 事業「概念型カリキュラムによる ESD 地域展開を支える 4 領域連携モデル」の支援を受けて行なわれた。

引用文献

Marschall, C., & French, R. (2018) *Concept-based inquiry in action: strategies to promote transferable understanding*. Corwin Press.

文部科学省国際統括官付日本ユネスコ国内委員会 (2021) 持続可能な開発のための教育(ESD) 推進の手引き改訂版 文部科学省